第四百十三回　青葉会

令和二年九月二十四日（木）午後一時半～五時　文京区民センター会議室

〈選者〉
◎川口孤舟

〈出席者〉
今井紀久男　川口孤舟　久米五郎太　小西弘子　佐藤ただしげ　長谷見びん　星田啓子
伊賀山そらお　柿崎忠彦　在間千恵　朱牟田恵洲　土谷堂哉　豊田ゆたか　古田昇　山崎亜也　山内天牛　渡邊盛雄

〈投句・選句〉
小早健介　宮内規雄　山田けい子

〈投句のみ〉
赤田堅　安部眞希子　重枝孝岳　庄司龍平　高橋敏郎　早川充章　橋口隆　福島正明　松崎浩　村田くに子　山本三恵

〈選句のみ〉

《互選句》　◎は孤舟選者の選　○は特選

九点
バリトンの声に蕩けて星月夜　千恵　（紀・五・敏・ゆ・隆・允・正・昇・○啓）
籠り居の暮れて秋刀魚のうす煙　びん　（そ・紀・五・た・ゆ・充・天・○三・盛）
◎残照を我がものにして月上る　啓子　（眞・紀・孤・た・孝・恵・ゆ・昇・亜）
弓取の肌美しく九月場所　けい子　（堅・紀・弘・堂・隆・充・浩・く・亜）

七点
ふるさとは大海原か鰯雲　健介　（紀・千・孝・龍・堂・び・充）

六点
舟屋口洗ふ波音星月夜　孤舟　（そ・龍・堂・昇・浩・亜）
爽やかや旅人癒やす駅ピアノ　昇　（堅・○眞・紀・弘・○正・盛）

五点
石仏に手合す山路秋の風　忠彦　（そ・紀・恵・龍・○天）

四点
真西なる遠き浄土や秋分日　五郎太　（堅・紀・弘・啓）
柘榴の実もういいかいとのぞき出る　弘子　（紀・た・堂・昇）
秋分の土乾きだす土竜塚　仝　（恵・啓・び・く）
秋芝居静かに拍手玉三郎　けい子　（忠・敏・正・天）
古演歌の短調身に入む気の疲れ　恵洲　（そ・紀・忠・正）
台風の逸れて安堵の雨を聞く　仝　（そ・○五・び・天）
秋風やわれ生きてをりマスクして　びん　（紀・敏・充・正）
◎永訣をみじかく鳴けりつくつくし　仝　（孤・恵・○堂・○盛）
◎虫の音の百科事典や山の宿　昇　（孤・千・敏・正）
◎鍵盤を滑る指先白く秋　啓子　（眞・そ・孤・天）
花生けに紅葉の山を写しけり　仝　（紀・た・孝・千）
◎北の道標識通りに鹿よぎる　亜也　（○忠・孤・正・三）
秋爽や見知らぬ人と萩の寺　盛雄　（敏・浩・く・天）

三点

眠り覚め夢振り返る夜長かな　そらお　（忠・龍・盛）
　全米オープン優勝の大坂なおみ
◎テニスの秋黒人名乗る日本女子　紀久男　（孤・隆・く）
汗拭きを引幕にして米團治　忠彦　（紀・五・三）
天へ抛る一網打尽秋夕焼け　孤舟　（紀・千・〇恵）
彼岸会や給湯温度一度上げ　仝　（眞・亜・三）
◎雑文も一つにまとめ夜長かな　五郎太　（堅・孤・び）
つるりむく北限の桃到来し　千恵　（紀・び・啓）
◎かっちりと粒がスクラム組む葡萄　仝　（孤・正・啓）
◎腕上げし妻に刈らせる秋の髪　堂哉　（孤・恵・〇龍）
無為の時流れて今日は秋に入る　仝　（紀・千・び）
彼方まで旅せし夢見秋の風　ゆたか　（紀・五・〇敏）
人はもう参らぬ墓所や秋の草　びん　（眞・ゆ・亜）
◎灯火親し血潮のたぎる幕末史　昇　（孤・充・啓）
汁粉でもぜんざいでもなく茹であづき　亜也　（紀・弘・浩）
（”茹で小豆”が夏の季語の由）
◎どんぐりのからから降りて夕暮れぬ　仝　（紀・孤・三）
ぱっくりと弾けし山椒の紅き殻　啓子　（た・ゆ・く）
ゆったりと浮世絵を見る夜長かな　盛雄　（堅・紀・天）
七草を忘るる秋やダイヤ婚　仝　（紀・弘・堂）

二点

実柘榴を見れば楽しき散歩かな　天牛　（千・ゆ）
ひそやかなる白き茶花の咲きにけり　規雄　（孤・浩）
「本能寺」（Eテレ放映）
米團治の芝居噺に新酒呑む　忠彦　（〇紀・盛）
さよならの盃も交じえぬコロナ秋　仝　（紀・隆）
秋天へレースの鳩の放たるる　孤舟　（〇弘・隆）
あのバリトンもう聞けぬのか月仰ぐ　千恵　（堅・紀）
雲晴れて風さわやかに一人酒　ただしげ　（紀・〇浩）
赤飯で子等と祝ふや敬老の日　仝　（隆・く）
痩せ様に秋刀魚不漁の腑に落ちぬ　恵洲　（啓・亜）
ほろほろと萩の散りたり子規の句碑　堂哉　（た・敏）
大桟橋に「飛鳥」百日秋深む　びん　（紀・盛）

一点

神泉の不老不死てふ水澄めり　昇（五・孝）
容赦なく歳は重なり十三夜　啓子（紀・弘）
コスモスや海へ海へとまっすぐに　けい子（五・昇）

また一人旧友逝きて秋深む　そらお（紀）
掛け声なく気分乗らない秋歌舞伎　紀久男（忠）
上方の芝居噺「本能寺」
派手な見得芝居がかりの秋高座　仝（忠）
炊きたての新米うまき炒り子かな　仝（龍）
（瀬戸内海のジャコの一夜干し）
コロナ禍に墓参でもめし家族かな　仝（忠）
扇子手に歌舞伎の仕草米團治　忠彦（紀）
山の湖鏡凪して月今宵　孤舟（紀）
文楽「鑓の権三」
女敵と権三討たるる秋祭　五郎太（紀）
台風来黒灰白の空低し　仝（忠）
秋気満つ五臓六腑に気を通し　仝（紀）
吾も入れて敬老の日の来たりけり　弘子（眞）
頂きまで青きりんだう名曲喫茶　仝（紀）
違反車を見廻る踵つづれさせ　仝（三）
敬老日神輿騎馬戦肩車　健介（孝）
澄み渡る雨上がりの空秋の蝉　ただしげ（浩）
心地良いひんやりした朝とんぼ飛ぶ　仝（〇孝）

檀一雄
コスモスや終の書斎の能古島（のこのしま）　堂哉（く）
（博多湾にある行楽地）
秋雲に富士白化粧世はコロナ　ゆたか（紀）
秋澄みて亡妻われを呼びにけり　規雄（忠）
長崎忌テレビの前の残暑かな　仝（紀）
狩勝や蒸機も人も喘ぎし日　亜也（紀）
小三治君成功祈る秋の会　天牛（紀）
（目黒の大ホールで小三治独演会）
読み了へし芥川賞月天心　盛雄（紀）

《句評》

九点句「バリトンの声に蕩けて星月夜」

①隆さん・・・昔、歌劇「夜鳴きうぐいす」の歌手４人と泉岳寺の「なか卯」で相席、ジョナサン・レマルのバス・バリトンの声に痺れたことを思い出した。「これには胡椒が入ってますか」。声を守るプロ生活。

②昇さん・・・詩情豊かな句で季語がよく効いている。

③啓子さん・・聞けば早逝したドミトリー・ホロストフスキーの歌声らしい。姿も良いに違いない。季語を星月夜としたのが想像を掻き立て美しい句になっていると思います。

「籠り居の暮れて秋刀魚のうす煙」

①三恵さん・・光景が目に浮かびます。自宅待機を「籠り居」って表現すると風情があっていいですね。風流人になったようです。

「残照を我がものにして月上る」

①恵洲さん・・月の擬人法だが、嫌味はない。月に残照が映えている感じが分かる。

②亜也さん・・スケールの大きなところがいいと思います。

「弓取の肌美しく九月場所」

①堂哉さん・・横綱不在でしたが新大関誕生のめでたい場所になりました。中七が光ます。

②亜也さん・・絵になっています。

六点句「舟屋口洗ふ浪音星月夜」

①堂哉さん・・伊根の景色が際立っています！季語が良いですね

「爽やかや旅人癒やす駅ピアノ」

①眞希子さん・・新築の新下関駅にもついに登場し感激したばかり。迷わずいただきました。

②正明さん・・外国では空港でピアノ弾く人が居て楽しい。音楽があれば世界は楽しい。人生は楽しくないと！

③紀久男・・・私もピアノ弾く人のことを句にしております。「秋の旅駅ピアニスト愉しげに」

四点句「柘榴の実もういいかいとのぞき出る」

①堂哉さん・・ユーモア、可愛いさに脱帽です。

②紀久男・・・童心に返る好句！　作者の感性に驚き。

「秋分の土乾き出す土竜塚」

①恵洲さん・・面白いものに目を付けられた観察眼が面白い。

「秋芝居静かに拍手玉三郎」

①紀久男・・・大向うの掛け声は禁止で役者も気合入らず芝居も盛り上がらず。。

「秋風やわれ生きてをりマスクして」
①紀久男・・・気重なりですがコロナ禍は春以来収まりそうになく外出にはマスクせねばなりません。
故、許容範囲と見てよいと思います。
「永訣を短く鳴けりつくつくし」
①孤舟さん・・セミの仲間では最も遅く、秋風が吹き出し涼しくなってから　姿を現す法師蝉。鳴き声はツクツクボーシと三度ほど鳴いてジーと尾を引くように鳴き終わる。この鳴き終わり方を「永訣」と感じたのであろう。
②恵洲さん・・法師蝉の短く終わったなき声を永の別れと取った想像力と、たかが蝉に永訣などと大袈裟な言葉を当てた意外さ。
「虫の音の百科事典や山の宿」
①孤舟さん・・山の宿で普段聴きなれない虫の声。どんな虫かを知るヒントを求めて百科事典で調べ始めた。
「鍵盤を滑る指先白く秋」
①孤舟さん・・しなやかな白い指が鍵盤上を躍る。美貌の女性ピアニストであろう。
「北の道標識通りに鹿よぎる」
①忠彦さん・・釧路に勤務で4年住みましたが鹿の衝突事故が怖かったです。懐かしい思い出です。
②孤舟さん・・道内で夜間高速道を走ると道端でキラリと光るもの。エゾシカの眼だ。「鹿に注意」の標識を立て、道路上での接触に注意を呼び掛けている
「秋爽や見知らぬ人と萩の寺」
①紀久男・・・季重なりを承知で採っておる人ばかりですが、気になるなら上五”秋爽や”を「奈良の旅」　又は「吟行」で如何でしょう。

三点句「テニスの秋黒人名乗る日本女子」
①孤舟さん・・大坂なおみの人種差別反対への意思の強さは、大和撫子の鑑。
②隆さん・・・「秋天や我も黒人なりと子女」。明確に正論を吐く若者を称賛したい。
「汗拭きを引幕にして米團治」
①五郎太さん・芝居噺の句の中で一番良い
②紀久男・・・幕明けの仕草が上手く印象的
「天へ抛る一網打尽秋夕焼」
①恵洲さん・・夕焼けの形状をまるで天に大きく広がる投網を打ったよう、という捉え方がユニーク。夕焼けの色も併せて雄大。
「彼岸会や給湯温度一度上げ」
①亜也さん・・正に実感。ただ、単に秋彼岸でいいのでは？
「雑文を一つにまとめ夜長かな」
①孤舟さん・・日々思いついたことを文章にして書き溜めてきたのであろう。そろそろ纏めて一冊の本にしてみよう。
「かっちりと粒がスクラム組む葡萄」
①孤舟さん・・一房の葡萄の粒が密集するさまは、まさにラグビーのスクラムにそっくりだ。

「腕上げし妻に刈らせる秋の髪」
①孤舟さん・・コロナ禍の影響で理髪店へ行く回数が減った。子供の頃母親に刈ってもらっていたように、最近は
妻の手を煩わせている。回数を重ねるにつれ、プロ級の腕前になったようだ。
②恵洲さん・・秋の髪、の下五省略が効いてうまい。
③龍平さん・・羨ましいです。ウチは孫が仕上げにしてくれるだけです。
「無為の時流れて今日は秋に入る」
①紀久男・・・外出できず家に籠って何をしていたのか定かでなく耳の痛い句です。
「彼方まで旅せし夢見秋の風」
①敏郎さん・・遥か彼方の彼方は”あの世”かも知れません。”あの世”を夢で旅するのは秋風のなせる悪戯か？
「人はもう参らぬ墓所や秋の草」
①亜也さん・・胸を衝かれた句。墓仕舞いが流行語になっている中、両親の墓参に行かなければと思わされました。
「灯火親し血潮のたぎる幕末史」
①孤舟さん・・昨今は歴史ブームらしい。殊に幕末の英雄たちの物語は興味津々、心が騒ぐ思いだ。
「どんぐりのからから降りて夕暮れぬ」
①孤舟さん・・村の社の杜でかくれんぼ。トタン屋根の物置小屋の陰に隠れていると突然大量のドングリが降ってきて
大音響をたてる。辺りは夕闇が迫りそろそろ家に帰る時間だ。
②紀久男・・・三鷹の公園吟行で経験しました。
「七草を忘るる秋やダイヤ婚」
①堂哉さん・・誠におめでとうございます!!!

二点句「ひそやかなる白き茶花の咲きにけり」
①孤舟さん・・茶の花は同類の椿や山茶花にくらべて華やかさはない。目立たなく、可憐で清楚な感じを受ける。
但し、「茶花」は「茶席に生ける花」の意故、「白き茶花の」は「白き茶の花」としたい。
②浩さん・・・「茶の花咲きにけり」ではいけないのだろうか？情景がとてもすきだが、字余りが気になる。
③紀久男・・・字余りはできるだけ避け、”ひそやかなる”の「る」は不要。
「米團治の芝居噺に新酒呑む」
①紀久男・・・父親の米朝の当たり芸を熱演。初演でしかも無観客のスタジオ録画の為一寸固さがありましたが光秀や
信長の派手な仕草を気持良さそうな高座でした。米朝は大阪産経ホールでしたが、歌舞伎座か新橋演舞場で
演じても大入り喝采は間違いありません。
「さよならの盃も交えぬコロナ秋」
①隆さん・・・「コロナ禍の秋に別離の酒もなく」では如何。
「秋天へレースの鳩の放たるる」
①弘子さん・・臨場感のある迫力ある作品と思います。

②隆さん・・・迷いなく一目散に飛ぶ勢い。
「赤飯で子等と祝ふや敬老日」
①隆さん・・・お祝いに欠かせないお赤飯。これだけで祝宴となる簡潔さ。
「痩せ様（やう）に秋刀魚不漁の腑に落ちぬ」
①亜也さん・・まったく同感です。
「容赦なく歳は重なり十三夜」
①紀久男・・・馬齢を重ねてもう八十路。今宵は月が冴え艶歌の「十三夜」でも唱いたくなる感傷的な作品。
一点句「敬老日神輿騎馬戦肩車」
①孝さん・・・すべて漢字がすばらしい。
「秋雲に富士白化粧世はコロナ」
①紀久男・・・コロナ禍に関係なく富士は初冠雪。例年通り。

＊　＊　＊　＊　＊

●次回青葉会
十月二十二日（木）午後一時半～五時　文京区民センター会議室
▲当季雑詠五句　投句二句（五句までお受けします）
令和二年十月八日　　文責　紀久男

令和二年九月　青葉会報

一、今月は初出席の長谷見びんさん始め7名。投句は天牛さんら13名。披講はいつもの五郎太さん。
びんさん挨拶代わりの三割九分磨きの「獺祭」（岩国）とチーズ、啓子さん持参の純吟「加賀鳶」（金澤）と煎餅・コロッケ、小生の煎餅を賞味しつつ（一）万里子先生の近況　（二）鍵和田釉子が死去
（三）「文芸春秋」10月号掲載の伊藤忠社長の放談、等を話題にし乍ら句会は順調に進み、ご覧のように初お目見得のびん（本名はさとし）さん、千恵さん、啓子さん、けい子さんが高得点でした。
回覧は（一）眞希子さんＦＡＸ　（二）川合友実（先生のご長男）さんからの葉書
（三）天牛さんＦＡＸ　（四）五郎太さんロカ線の思い出文　（五）堂哉さんの句集

二、関係者近詠
課さずとも自粛めく平生や辣韮むく　　眞希子
夢持てと「赤毛のアン」よりコロナ梅雨　　仝
幹道に夏草猛り赤字市政　　仝
口実に想定外とよ蜥蜴逃ぐ　　仝
空蝉のあの爪ぢから妻にこそ　　陽亮
同じ向きに座してみんみん聴きにけり　　仝
茅屋のとぼそ叩くは西日のみ　　仝
夏帯のお岩稲荷に祈りをり　　紀久男

母の忌の空に溶け出す梅雨の月　弘子
山内に仁王の許す蟻地獄　仝
むすりともせずに山蛭足を吸ふ　仝
足元へズボン脱ぐごと竹の皮　仝

ーーー「森の座」九月号

秋風や片仮名目立つ日記帳　正明
転轍機季節を秋へ切り換へる　仝
碁敵の静かに逝けり虫時雨　充章
平凡に生きて今宵は衣被　仝
人の世は一炊の夢芙蓉咲く　仝

太陽の塔いよよ小さく鳥渡る　盛雄
休み田にいのち奏でる虫しぐれ　仝
菩提寺の僧は独り身小鳥来る　盛雄
手料理の腕上げし妻涼新た　健介
虫集く夜更けに手術無事の報　仝
鷹渡る原発岬の夕空に　紀久男
手も足も見やう見まねの盆踊　仝
戦禍癒えぬ沖縄襲ふ台風来　仝

ーーーきさらぎ句会　九月

三、八月句会報　盛雄さんの五点句「心奥に彼の人の声大文字」振り仮名を間違えましたのでお詫びして訂正します。
（誤）「しんのう」→（正）「しんおう」

令和二年十月八日　紀久男　記